様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 ２０ 日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2012～2015
課題番号：２４６５１２８３

研究課題名（和文）「国家的危機」における身体の柔軟性と選別に関する分析：３．１１後のナショナリズム

研究課題名（英文）Flexibility And Classification of Bodies in "National Crisis": Nationalism after 3.11

研究代表者
清水　晶子（SHIMIZU, Akiko）

東京大学・総合文化研究科・准教授

研究者番号：４０３６１５８９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,000,000円

研究成果の概要（和文）：当研究は、3.11以降の日本において「ナショナルなもの」の危機を契機に特定の身体を露骨に優先する言説が一気に顕在化し、一定の支持を集めてしまう社会状況を考察し、生や身体の選別や序列化をめぐる言説がいわば日常化しつつあること、「ナショナルなもの」の立ち上げは未だにその過程で大きな力を持つことを明らかにした。また、クィアスタディーズとディスアビリティスタディーズとのそれぞれの理論構築に内在する限界や問題を踏まえつつ、双方の領域の中心的課題である多様な生と身体の生存可能性の拡大に向けたさらなる領域横断的な取り組みの必要性を確認し、そのための理論的基礎を提示した。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research is to examine how the idea and discourse of “the national” have been deployed in screening and ordering diverse lives and bodies in post-3.11 Japan. The research has revealed the way in which a “national” crisis has led to a “normalization” of a social discourse of screening and ordering by giving rise to blatant prioritization of certain groups of bodies. Through a critical examination of the problems and limitations of both queer theories and disability theories, the research has also demonstrated a crucial interdisciplinary approach to enabling and increasing the survivability of diverse lives and bodies.

研究分野：クィア理論

キーワード：クィア理論　障害学　ナショナリズム　3.11　生政治

１．研究開始当初の背景

2001 年のいわゆる 9.11 を契機に開始された「テロとの闘い」は、マイノリティによるリベラルな権利運動が易々とナショナリズムへと動員されていく様をわたしたちに見せつけるとともに、両者の共犯関係を批判的に把握するための視座の重要性を気づかせることとなった。なかでも英米の文化理論において注目を集めているのが、クィア理論と障害理論の視点を交叉させたクィア障害理論である。

しかし、3.11 以降の日本の状況分析に、それらの研究をそのまま当てはめることはできなかった。社会的緊急事態という点で共通性が見出されるとはいえ、9.11 と 3.11 はまったく異なる事象であり、結果、ネイション構築のあり方とそこで生産される「ふさわしい国民／市民」像は大きく異なると考えられたためだ。また、英米のクィア障害理論は、場や空間、関係性に拘束される身体に着目する視点に欠けており、この点で 3.11 以降の日本で顕在化している特定の身体（たとえば、異性愛で健常な身体）を前提し優先する言説を十分に問題化できない。

このような状況を背景に、本研究では、フレキシビリティ（可塑性）とスクリーニング（選別）という二つの観点から、身体や生にまつわる規範と国民国家を維持する規範との関連に注目しつつ、3.11 以降の日本におけるナショナリズムのあり方を明らかにすることを試みた。

２．研究の目的

2011 年 3 月 11 日の東日本大震災とそれに続く東京電力福島第一原発事故という社会的緊急事態を契機に、さまざまな状況を利用しナショナルなものを新たに立ち上げようとする機運が高まった。しかし、その過程においてヴァルネラビリティの不均衡な配分構造は相変わらず温存されたままであり、結果、異性愛中心主義や健常性中心主義から外れる身体や生を生きる者に大きな不利益が生じている。こうした状況への危機感から、本研究では 3.11 以降の日本におけるナショナリズムのあり方を批判的に再検証することを試みた。その際、フレキシビリティとスクリーニングという二つの鍵概念を設定し、身体や生にかかわる規範と国民国家を維持する規範とのかかわりに注目した。具体的には、次の三点を研究の目的とした。

(1）スクリーニングを通して追求されるフレキシビリティ概念の理論的な検証を行うこと。

(2）これらの概念を用いながら、3.11 以降の日本で登場している具体的な言説・現象の分析を行うこと。

(3)上記分析に基づき、身体や生にかかわる規範と日本のナショナリズムの関係を理解するための理論構築を行うこと。

３．研究の方法

上記研究目的を達成するため、クィア理論及び障害理論の研究者から成る研究体制を組織し、それぞれの専門性に基づく研究を推進するほか、定期的に研究会を開いて報告と意見交換を行うことによって、相互に知見を参照し、それぞれの研究を有機的に連関させる方法をとった。また、公開シンポジウム等を開催して関連研究者との議論の場を積極的に設けるとともに、学術誌等での研究成果の発表も行った。それぞれの研究者の具体的な役割は以下の通りとした。

（1）研究代表者の清水は、性や身体、欲望を巡る諸規範が特定の歴史的、文化的文脈においてどのように作用するのか、また、非規範的な生や身体がどのような文化的、社会的、あるいは身体的な実践を通じて、そのような諸規範を生き延びあるいはそれらに抵抗するのかについて、分析と理論構築とを行ってきた。本研究では、このような分析の蓄積の上で、オルタナティブなクィア理論史構築という観点から課題にアプローチするほか、研究全体の統括を行った。

（2）研究分担者の飯野は、公的領域/私的領域を区分する境界は可変的で、諸活動を二つの領域のどちらかに振り分ける行為そのものが権力行使であるとの観点から、公私区分の構築と男性中心主義・異性愛中心主義・健常性中心主義との関係について分析を行ってきた研究者であり、本研究ではフェミニズム障害理論の観点から課題にアプローチした。

（3）研究分担者の星加は、障害（ディスアビリティ）に関する関係論的な理論モデルの構築や、シティズンシップの階層性と障害者の社会的位置の関係についての分析を行ってきた研究者であり、本研究では障害理論の観点から課題にアプローチした。

４．研究成果

1960 年代に登場した「新しい社会運動」は、集合的なアイデンティティや集合的な経験を基盤に市民性を求めていく運動であった（たとえば、初期のフェミニズム運動や 70 年代以降の障害者運動）。しかしこうした運動には、身体を含めた個々人の経験の固有性や差異が捨象されるという陥穽があった。このような問題意識を背景に登場したのが、アイデンティティの流動性・可変性を主張する運動、あるいは差異の尊重を主張する運動である。たとえば、有色人種や性的マイノリティの女性たちからの批判を経由した後のフ

ェミニズム運動や、1980 年代のエイズ危機の中から登場したクィア運動は、そうした運動の典型である。

しかし、本研究初年度に行った先行研究の検討を通して明らかになったのは、流動的アイデンティティの強調や差異の主張は、新自由主義的な価値観に容易に再回収されうる側面をもっているという点である。この現象は、先にあげた運動が商業化／市場化されていく中で、「ライフスタイル」や「選択」をめぐる言説を多用するようになったことに端的に表われている。しかし、本研究のテーマにとってより重要なのは、そうした言説が、自らのアイデンティティや（身体・言語）能力をフレキシブルに再構成したり組み合わせたりできる者とそうではない者との間に大きな不均衡を生み出している点である。ここには、流動的アイデンティティの強調や差異の主張が、新自由主義的な自己責任能力をもつ個人の称揚へと再回収される危険性があることが示されている。

さらに、9.11 後の米国について論じた先行研究の検討からは、先に指摘したような不均衡が、社会的／国家的緊急事態下において、より暴力的に作用しうるという懸念点が明らかになった。以上のような理論的整理を前提として、3.11 後の日本社会において生起している言説や現象に関して、非規範的な身体や生という観点から分析を行った。

この点に関する本研究の主要な成果は、3.11 後の〈国家的危機〉への対応として、リスクに対する主体的で計画的な対処を要求する言説が浸透する中で、どのような身体－自己がより望ましい〈国民〉として産出されつつあるのかを明らかにした点にある。とりわけ、「子どもを守れ」というフレーズに代表されるような再生産要請が露骨に顕在化した社会状況において、地理的・空間的な可動性の差異による分断、性規範に関わる分断、身体の「健常性」の差異による分断が、相互に複雑に絡み合いながら進行する様態を分析した。さらに、「リスク管理」（いまだ実現していない危機への対処）という視点が導引され、〈危機〉のリアリティが日常化することによって、身体や生の分断・序列化が無限定に拡張されていくという問題を、「トリアージ的思考の常態化」という概念で把握する視点を提示した。

本研究を通じて、クィア理論とディスアビリティ理論が交差する領域で取り組まれるべきものとして「身体性と市民性の（共犯）関係」というテーマが見えてきた。医療・科学技術の進展は、ゲイカップルが代理出産によって「自分の子」をもつように、身体をよりフレキシブルに断片化することを可能とした。こうした現象を前にして、医療・科学技術を誰がどのような形で享受するのか、どのような制度がそれを取り仕切るのか、その結果、どのような身体の階層化が起きるのかといった問題は緊急性を増している。また近年、性的マイノリティや障害者の「経済的主体としての包摂」がさまざまな国々で進んでいる。こうした新自由主義的な価値と親和的な包摂が、日本の文脈においてどのように進行していくのか、それが生み出す序列化によってどのような身体や生がより周縁に置かれてしまうのかといった問題も避けては通れないだろう。現在、クィア理論とディスアビリティ理論が交差するこうした課題に関する書籍を準備中である。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　3　件）

①<u>飯野由里子</u>「折り合いの悪さに付き合う―障害をめぐる支援というテーマのもとで」『社会学年誌』56 号、早稲田社会学会、2015、pp. 19-33、査読有。

②<u>星加良司</u>、「『分ける』契機としての教育」、『支援』5 号、2015、pp.10-25、査読無。

③<u>清水晶子</u>、「ビサイドのクィアネス――イヴ・セジウィックにおける接触」、ブックレット『グローバル化時代における現代思想 vol.1 香港会議』（中島隆博・馬場智一編）、2014、pp.85-99、査読無。

〔学会発表〕（計　5　件）

①<u>星加良司</u>、「トリアージ的思考と身体の選別」、東京大学大学院教育学研究科附属バリアフリー教育開発研究センター主催公開ワークショップ、東京大学（東京都文京区）、2016.2.11.（口頭発表）

②<u>清水晶子</u>、「距離の操作と越境の拒絶」（応用哲学学会シンポジウム）、日本応用哲学学会、東北大学（宮城県仙台市）、2015.4.25（シンポジウム招待）

③ <u>飯野由里子</u>、「「支援」をどう政治化していけるか？――「ケアする側であると同時にケアされる側でもある」という立場性を活かしつつ」、早稲田社会学会第 66 回大会、早稲田大学（東京都新宿区）、2014.7.5（口頭発表）

④<u>清水晶子</u>、'Touch Me Not: Keeping A Queer Distance in Postcolonial Japan', Crossroads2014 (2014/7/3, University of Tampere, Tampere, Finland).（口頭発表）

⑤<u>星加良司</u>、「社会学からみた障害の概念」日本保健医療社会学会第 39 回大会、東洋大学（埼玉県朝霞市）、2013.5.18.（招待講演）

〔図書〕（計　0　件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計　０　件）

〔その他〕
ホームページ等：構築中

６．研究組織
(1)研究代表者
清水晶子（SHIMIZU, Akiko）
東京大学大学院総合文化研究科 准教授
研究者番号：40361589

(2)研究分担者
星加良司（HOSHIKA, Ryoji）
東京大学大学院教育学研究科 講師
研究者番号：40418645

飯野由里子（IINO, Yuriko）
東京大学大学院教育学研究科　その他
研究者番号： 10466865

(3)連携研究者 なし